

さくらだより [36号]



2013年11月16日発行

ドイツで装着型のロボットを使い高齢者などの運動障害を改善する治療が始まりました。治療費は保険で賄われるそうです。日本の茨城県つくば市の企業が開発したロボットですが日本では承認を受けていません。少子高齢化社会がもたらすのは、医療費の増大と若者の負担増です。脳梗塞や脳卒中で運動障害、機能障害がおきると皆寝たきりとなり、介護が必要です。介護ロボットが進歩すれば、介護に携わる人の手も少なくて済み、年々ふくれあがる社会保険料の抑制にもなります。人は病気を治したくて医療機関にかかります。それは長生きしたいからです。病気になったら寿命だから仕方がないと治療を拒否する人は少ないでしょう。医療が進歩し、癌が治り、再生医療で機能回復ができれば人はますます長生きするでしょう。でも、細胞の老化や脳の委縮は現在ではどうにも対処できません。でも少しでも運動機能などの介護がロボットの助けをかりて可能ならば、その人のクオリティオブライフがよくなることは間違いありません。老人を病院や老人ホーム等に収容して介護をするという現在のあり方から自分の家で家族の手をかりずに、介護ロボットに助けられて生活するスタイルが日本でも数年後には始まるのでしょうか。医療介護等の社会保障費の膨張は止まりません。2011年度の社会保障費は38.6兆円で過去最高を更新していると報告されました。2013年度は40兆円を突破するという見通しのようです。国民医療費は1兆円を超え、国民1人あたり30万円を超えたとの事です。国の借金のつけは子供達にまわっていきます。医療は治すことであり、放っておくことではないはず。おしよせる高齢化社会で1人でも多くの老人が人の手をかりずに生きていける医療体制が1日でも早く達成されることを望みます。

